

# 心理学史の 複線径路

[第1回]

## キルケゴール

### サトウタツヤ

立命館大学文学部教授／研究部長。日本心理学会歴史小委員会委員長。今回から新シリーズが始まります。心理学史も物語の一つ。現在の支配的な歴史観を相対化するようなことを考えていきたいと思います。



S. A. キルケゴール (1813-1855)

かつて第60号で、**歴史＝事実×物語性**だと書きました。事実が無い物語は存在しうるけれど、事実が無ければ歴史になることはあり得ない、という意味でした。では、事実というものが安泰で明確な概念なのかというと、これも難しいのです。少なくとも事実が全て歴史になるわけではない、ということは誰でも実感できると思います。取捨選択が行われていることは当然だといえるでしょう。

たとえば、今回取り上げるキルケゴールが歴史上のある時点において実在したことは、皆さん薄々知っていたと思います。しかし、心理学史として取り上げるということになれば、少し疑問符がつくのではないのでしょうか？

歴史研究をやっている人たちはひねくれ者が多く、誰もが知っている当たり前のことには食指が動きません。誰も知らなかった人、知らなかった結びつきを書くことで快感を得るのです。今回から始まる新シリーズでは、「複線径路」という語を用いて、マスターナラティブ化した心理学史とは異なる心理学史の可能性を考えてみたいと思います。

さてブランデイスというデンマ

ーク大学教授が1881年にドイツの哲学者・ニーチェ (Nietzsche, F; 1844-1900) にあてた手紙の中で「キルケゴールこそ、最も優れた心理学者だ」と書いています。

このように書くと、当時の心理学と今の心理学は違うのだから、そんなことはどうでもよいではないか、という感想を持つ人がいます。これは当然です。しかし、話は逆なのです。19世紀当時において、キルケゴールのことを優れた心理学者だと呼ぶ人がいた事実の上に、今の心理学があると考えべきなのです。

実際、キルケゴール本人が心理学という語を使っていたという事実があります。『反復』(1844)という書の副題はデンマーク語の *experimenterende Psychologie* が含まれており、『責めありやー責めなしや』(1845)の副題も *Et psykologisk Experiment* なのです。『不安の概念』(1844)の副題は *En simpel psykologisk ……*、『死に至る病』(1849)にも *En christelig psykologisk ……* という副題があります。つまり、副題に心理学という語が入っている本がきわめて多いのです。Sharpless (2013)によれば、キルケゴールは、心理学を科学的心理学と体験する心理学 (experimenting psychology) に分けているようであり、前者には批判的でした。

『あれかこれか』(1843)に出てくる耽美主義者ヨハヌスは、コーデリアという女性に心理学を実験して(試して)みます。実験室に連れてきて何かをするわけではあ

りません。この時期、条件設定して何かを試みるということが実験だったのです。結果を確かめるための条件設定、という考えを人間の思考や行動にも適用することを小説という形で行ったのが、キルケゴールの心理学だったのです。このやり方は実証主義そのものではありませんが、小説という形だったからこそ多くの人に読まれることになり、心理学における実験のあり方をイメージさせることになったのかもしれない。キルケゴールの日記には「わたしは現実の物語のかわりに実験を好んで用いてきた」という記述もあるようで、彼が小説という表現形態の中で心理学や実験というものを自分なりに用いていたことは間違いのないようです。

なお、キルケゴールが活発に著作を発表していた1840年代は、心理学史的にはヴントの実験室(1879)設立前夜、という時期です。これまで、キルケゴールと心理学もしくは実験との関係はあまり重視されてきませんでした。彼こそ忘れられてしまったもう一つの心理学史の主役だったのかもしれない。近代心理学設立以前のこの時期の心理学はどのようなものだったのかを検討することによって、キルケゴールの心理学の意義が明らかになるでしょう。

### 文 献

Sharpless, B. A. (2013) Kierkegaard's Conception of Psychology. *Journal of Theoretical and Philosophical Psychology*, 33, 90-106.